

台北の歴史を歩く 士林地区の歴史を巡る（2）

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。その市域人口は263万を誇り、文字通り、台湾の中枢として機能している。その台北の歴史をたどる旅。今回は台北市北部に位置する士林地区の歴史を辿ってみたいと思う。

生まれ変わった士林夜市

士林夜市周辺地域の再開発事業が進められたのは1999年からである。建物の老朽化を理由に、台北市は士林公有市場一帯の屋台を一掃してしまった。昔ながらの風情を惜しむ声は非常に大きく、保存運動も起こっていたが、台北市は強力に再開発の計画を推し進めた。

2002年10月14日にはMRT 劍潭駅前に臨時市場が設けられ、屋台や商店はこちらに移された。この建物は仮設ということもあり、とても簡素な造りだった。夜市らしい趣きは全く感じられず、評判はよくなかった。

その後、2011年12月に士林夜市のリニューアル工事は完了する。屋台街は修復された公有市場の建物の地下部分に入ることとなった。これにより、劍潭駅前にあった臨時市場は役目を終え、年明けから早くも撤去作業が始まった。現在、ここには「台北芸術中心」という市営の公共ビルが建



現在の士林夜市。往年の屋台街は地下に入っているが、正直なところ、通気が悪く、評判はよくない。

設中である。

現在の士林夜市は一階に226店舗、地下一階に飲食店が94店舗入っている。地下二階と三階は駐車場となっている。オープン当初は飲食屋台から出る煙や匂いがひどく立ちこめ、不評をかった。そして、風情が感じられないばかりでなく、テナント料の高騰が販売価格にも影響し、「台湾で最も高価格な屋台街」と揶揄する声も小さくない。

台北市士林国民小学図書室一八芝蘭公学校門柱・旧講堂

士林に残る日本統治時代の学校建築についても触れておきたい。士林の中心部に位置するこの学校は台北市内有数のマンモス校である。そして、芝山巖学堂を起源とする台湾で最も古い学校でもある。

この学校は1895（明治28）年に設けられた芝山巖学堂を前身としている。これは連載三回目で紹介した芝山巖（現芝山公園）に設けられたものだが、翌年に国語学校第一附属学校として、現在の場所に移転している。

1898（明治31）年に八芝蘭公学校と改名している。士林公学校となったのは1921（大正10）年のことで、1941年には学制の変更で、国民学校となっている。

校舎はすでに建て替えられており、往年の面影を残してはいない。しかし、校門を入り、校舎を突き抜けると、講堂として使用されていた建物が図書室となって残っている。

講堂は1916（大正5）年12月25日に竣工したものである。どっしりとした風格を漂わせた建物で、シンプルなデザインではあるものの、強烈な存在感を放っている。ここ数年は老朽化が目立っていたが、創設90周年を記念し、校友会が中心となって寄金を募り、修繕作業が施された。

旧講堂の入口には「八芝蘭公学校」と刻まれた一對の門柱が残されている。この門柱は90年以上も前に使われなくなったものだが、学校によって守り継がれてきた。

長らく構内の片隅に置かれていたというが、現在は学校の歴史を物語る遺構として扱われており、旧講堂とともに、手厚く管理されている。

門柱から旧講堂までの小道は緑に覆われて美しい。案内板が整備されているわけではないが、歴史という名の重みはしっかりと感じられる。なお、当校の校史館には、日本統治時代の校旗なども保存されており、一見の価値がある。

士林公学校校歌

台湾神社宮司 山口 透 作詩

国語学校助教授 鈴木保羅 作曲

一

我が里近き 劍潭山（けんたんざん）

島の鎮めの 宮所（みやどころ）

尊き御影（みかげ）を 仰ぎつつ

共に務めて 学べし

二

我が里近き 芝山巖（しざんがん）

今の教への もとどころ

まめひき績を 偲びつつ

共に励みて 学べし

三

士林の里は もの学び

早く開けて 名に負えり

我らも共に 進みつつ

務め励みて 学べし

圓山浄水場と眠れる神社遺跡を訪ねる

MRT（新交通システム）淡水線劍潭駅のホームから山麓を見ると、往来の激しい中山北路の先に水道局の建物が見える。そして、この建物の脇の小径を進んでいくと、圓山貯水池がある。

日本統治時代の社会事業は衛生管理に始まったと言っている。台湾総督府は領台当初から台湾の衛生事情を改善するべく、あらゆる策を講じた。当時、台湾に渡った日本人が最も恐れたのは南国特有の疫病だった。マラリアやコレラ、ペストなどは日本本土では症例があまり見られないこともあり、不安を増長させていたようである。

こういった「見知らぬ病」について、当時は適確な対処法がなかった。ただ一つ、確実なのは、熱帯病は衛生管理によって予防できるということだった。そして、公衆衛生に対する細心の注意が払われるようになる。上下水道の整備が急がれたのは、当然の成りゆきだった。

都市部においては、早くから水源が整備されている。台北については1909（明治42）年4月、市内南部に観音山浄水場が完成している。これは台北市街の南辺を流れる新店溪を利用したもので、位置的に偏りがあった。また、供給できる水量は一日12万人分程度だった。

台北市は大正時代に入った頃から急激に人口が増えている。そして、市街地は北に向かって広がっていた。1921（大正10）年には台北市の人口が20万人を突破している。圓山（まるやま）、士林地区も着実に成長を遂げていたこともあり、市の北部に新しい浄水場の造営が決まった。

ちなみに、1941（昭和16）年に発行された『台湾水道誌』（台湾水道研究会）によると、当時、台湾に設けられていた水道施設は114箇所におよんでいる。規模別に分類すると、送水対象となる人口が4万人以上のものは台北（32万）をはじめ、基隆（10万）、台中（5万）、彰化（4万）、嘉義（5

万)、台南(10万)、高雄(15万)、屏東(4万)の8箇所、3千から1万となる中規模水道施設が46箇所、3千以下の簡易水道が60箇所となっている。

欧州式の濾過システムが採用された

台湾総督府に限らず、明治期の日本は水道処理のシステムを欧州に学んでいた。江戸時代、日本の水道処理は自然濾過を手法とするもので、地中に埋め込んだ樋に水を流すという簡素なものが主流だった。当時の技術水準から見れば、高い精度を誇っていたというが、それを疫病の蔓延しやすい亜熱帯地方で用いることはできなかった。なぜならば、施設に菌が入った際、水道施設が病原菌を運ぶ連絡経路となってしまうからである。

そんなこともあって、台湾ではいち早く沈殿と濾過によって浄水作業を施す欧州式のシステムが採用された。観音山浄水場はその先駆となった存在である。これ以降、各地の水道処理施設はこの方式が踏襲されていくことになった。

観音山浄水場を補完する新しい浄水場は1932(昭和7)年に完成した。水源は草山(そうざん)に設けられた。前稿でも述べたように、草山は戦後に陽明山と呼ばれるようになった景勝地である。水資源が豊富なばかりでなく、水質も良好だった。

この草山の麓から圓山まで水道管を設け、浄水処理を済ませた後、台北市内へ送水する。その貯水能力は大きく、毎日17万人の飲料水を確保できたという。

圓山浄水場の工事は1928(昭和3)年4月に始まり、4年の歳月を経て完成を見た。平坦な土地ではなく、山の斜面に造営されたため、工事は容易ではなかったようだ。しかし、完成以来、ここは昼夜を問わず、市民の暮らしを支えることとなる。まさに台北の水瓶と呼ぶにふさわしい機能を発揮した。

水神社と呼ばれた祠の遺跡

圓山大飯店(グランドホテル)は台湾を代表する高級ホテルである。その裏手にはハイキングコースが設けられており、市民の憩いの場となっている。この圓山大飯店は官幣大社台湾神社の跡地に建っているが、ここで紹介したいのはそれとは異なる小さな神社の遺跡である。

この神社は「圓山水神社(まるやまみずじんじゃ)」と呼ばれていた。浄水場の脇に設けられ、その名前から見ても、水と深い関わりを持っていたのがわかる。当然ながら、日本人が去ったことで、神社は存在意義を失なった。この場合も、長らく雑草に埋もれた状態で遺棄されていた。

訪れてみると、浄水場の脇に平坦な空間が広がっていた。目の前にあるのは蓄水池で、神社の遺跡はそこに寄り添っていた。

まずは「圓山水神社」と刻まれた石碑が目についた。高さは1メートルほどで、大きなものではない。それでも、しっかりとした台座が組まれている。保存状態は良好だ。背後には石灯籠も残っており、こちらも往時の姿を保っている。後方をのぞき込んでみると、「昭和十三年四月二十七日建立」という文字が確認できた。

文献が少ないこともあって、この神社の詳細を知ることは難しい。しかし、1938(昭和13)年4月27日の台湾日日新報に鎮座式が行なわれたという記事が確認できる。石灯籠に刻まれた日時が神社の鎮座日であると考えれば、ここが神社として存在したのは、終戦までのわずか7年あまりである。人里離れた寂しい場所であることを考えると、この神社の存在はどのくらいの人に知られていたのだろうか。

石灯籠の前面には奉納者として「台北市水道課有志」という文字が刻まれていた。これからもわかるように、この神社は台北市の職員によって創建された。当時、神社を統括していた内務省の台



圓山水神社の全容。狛犬や石段の存在は確実にここが神社であったことを伝えている。保存状態は良好だ。



石灯籠の脇には水瓶も残っていた。水は入っていたが、落葉に埋もれ、ひどく澱んでいた。裏には「武部八三郎」と寄贈者の名も刻まれている。

帳にも記載はなく、私設祠、無願神社と呼ばれたものである。「神社」を名乗ってはいるが、実際は私設遙拝所と分類したほうが適切かもしれない。

石段の上方には本殿跡と、さらに一對の石灯籠が見える。石段を踏みしめて本殿跡へ向かう。途中にわずかな空間があり、参道を挟み込むように狛犬が向かい合っている。往年の姿を保ってはいるが、周囲は雑草が茂っている。半世紀にもわたって孤独を強いられた一對の狛犬は、愛嬌のある顔立ちの中に、どこか寂しそうな表情を浮かべていた。

本殿があった場所には土台だけが残っていた。現在は簡素な中国式の屋根が設けられている。誰かがここで休息をとるわけでも雨宿りをするわけ



神社の名を記した石柱はほぼ無傷で残っている。この神社遺跡がどのような戦後を過ごしていたのかは不明である。



一對の狛犬が雑草に埋もれるように残っていた。この神社についての記録はなく、詳細は不明である。

でもないのに、この屋根が何を目的に設置されたのか、推測はつかない。ただ、人類にとって水が不可欠なのは、日本人も台湾人も、そして中国人も同じである。本殿こそなくなったが、水源地に設けられた祠はどの時代もこの場所に生き続けていくようにも思えてくる。

本殿跡から石段を振り返ると、遠くに見える士林地区の家並みが夕陽を浴びて輝いていた。一瞥だけでその活気が伝わってくる台湾らしい風景である。しかし、生い茂った樹木にさえぎられてし

まうからだろうか。喧噪はここまでは届かない。神社の遺跡は静寂に抱かれるように眠っている。

草山水道と送水管

最後に、浄水場に関連のある遺構をもう一つ、紹介しておきたい。ここは前々回紹介した天母地区の後方に位置する産業遺産である。現在は古蹟として扱われており、関心を抱く人も徐々に増えてきた。水源地から水を運ぶために用いられた送水管である。

天母の住宅街から山中に向かってのびる自然散歩道は、かつて、台北と金山を結ぶ産業道路だった。現在は「天母古道」という名で整備されており、早朝に訪れると、散策を楽しむ人々で賑わっている。

1400段もあるという長い石段を踏みしめていくと、途中から太い水道管が左手に寄り添ってくる。これは草山の水源地と台北を結ぶ水道施設の一部である。この送水管は日本統治時代に設けられたもので、現在も使用されている。文化財指定も受けており、保存対象にもなっている。

現在も水力発電所や水道橋など、山中にはいくつかの施設が残っており、いずれも現役である。その性格上、一般公開はされていないが、年に数回の公開日が設けられている。台北市民の暮らしを支え続ける水道施設は山中で静かにその役目を果たしている。

草山に水源地が開かれたのは1932（昭和7）年のことだった。先述したように、人口が急増していた台北市の新しい水瓶として設けられた。これは「台北水道第二拡張工事」と呼ばれたが、その最大の特色は水質が良好なため、濾過を省略でき



水源地から天母までを結んでいる送水管。現在も使用されており、文化財指定を受けている。

ることになった。

当初の調査では草山地区の3カ所の湧水が候補に挙がった。最終的には第一湧泉（水源）と第三湧泉で取水が行なわれることとなった。第一湧泉は海拔541,3メートルの地点にあった。これに対し、第三湧泉はやや低いところにあり、海拔303メートルの地点にあった。第一湧泉から第三湧泉までは鉄管を通して送水され、調整井に流し込まれていた。

当然、第三湧泉から先にも送水管は設けられていた。湧泉の水面は299,55メートルとなっていた。ここから海拔90,72メートルの地点まで落とし、約200メートルの落差を用いて発電も行っていた。

最終的に水が送り込まれたのが圓山に設けられた貯水池であった。ここに溜め込まれた水が基隆河を越えて台北市内に送られていった。送水区間が長かったこともあって、工事は約4年の歳月を要し、工費2,142,132円が費やされたという記録が残っている。

今回は士林・北投以外の台北郊外エリアの歴史を取り上げてみたい。